

令和5年度 磐田市立南部中学校 学校経営構想

1 はじめに

新型コロナウイルス感染症は、世界各地で人々の生命や生活、価値観や行動、さらには 経済や文化など社会全体に広範かつ多面的な影響を与えており、まさに予測困難な VUCA 時代が到来している。また、こうした流れは、Society5.0 時代に向けた動きとも重なって、従来の考え方や方法では解が見つからない、あるいは正解が一つとは限らない社会問題にどう取り組むかという大きな問題を提起しており、想定外の事象と向き合い対応する力や、不透明な未来を切り拓く力をどう身に付けさせていくかなども、コロナ禍を機に改めて考えるべき課題とされている。

このような予測困難な未来を生きる子供たちには、学校において、様々な変化に主体的に向き合うとともに、個の多様性を受け入れながら、他者と協働しながら価値の創造に挑み、持続可能なよりよい社会を形成していく力を身に付けることが求められている。それらの力を確実に身に付けさせていくためにも、新学習指導要領の理念のもと、学校として子供たちに身に付けさせたい資質能力や各教科で学ぶべき内容などの全体像を明らかにするとともに、1人1人の子供を大事にし、学校教育そのものを学習者（生徒）主体の視点に転換していく必要がある。

一方、中学校教育の現状を見ると、子供たちの多様化（特別支援教育を受ける生徒や外国人生徒の増加、貧困、いじめの重大事態や不登校生徒の増加等）への対応や子供の学習意欲の低下、新型コロナウイルスに始まる、今後起こりえる新たな感染症等への備えとしての教室整備や指導体制等の充実など、様々な課題が指摘されている。これらの課題に対応し、子どもたちの命や安全を守り、ウェルビーイング（幸せな状態）の実現を目指すためには、学校を教職員の力だけでなく、家庭や地域の教育力を生かしたり、関係諸機関との連携を図ったりしながら創っていく「地域と共にある学校」を推進していくことが必要不可欠である。さらに、子供のウェルビーイングの実現のためには、教職員のウェルビーイングが保障され、幸せな大人であり続けなければならない。本年度も令和4年度同様、働き方改革の視点から、業務の明確化・適正化、勤務時間を意識した働き方の推進、ミドルリーダーや若手教職員を中心とした、自律自走できる教職員集団の育成に力を注ぎながら、学校に関わる全ての人が幸せを感じられるような体制・組織作りに努めていく。

2 令和5年度の基本構想

この2年間大切にしてきた、生徒の「主体性を育む」というキーワードを継続させ、「間違いや失敗を恐れず、主体的に行動した結果、自信を深めたり、失敗経験を生かしてたくましさが増したりすることで、自分の新たな良さや可能性を発見し次の行動へ繋げる」といった、主体的な行動の先にある個の成長を目指しながら、学校教育目標の実現や、本校が抱える課題の解決に繋がっていきたいと考える。

○学校教育目標

『自ら学び 共に生きる たくましい生徒』（令和元年度より、来年度5年目）

それぞれの目標で期待する生徒像

「自ら学ぶ生徒」・・・学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的に学ぶ」生徒。

「共に生きる生徒」・・・思いやりの心や感動の心を持ち、集団の中で一人一人の存在感が認められ、相互に高め合っていくとともに、地域に生きる人として、地域社会のために貢献しようとする「主体的に行動する」生徒。

「たくましい生徒」・・・「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感をもち、何事にも失敗を恐れず、勇気をもって取り組むことで、自分の可能性を見つけ、広げようとする「主体的に挑戦する」生徒。

○重点目標（～こんな南部中生になってほしい～）

「間違いや失敗を恐れず主体的に行動し、自分の良さや可能性に気付くことができる生徒」

○学校経営の基本方針（マニフェスト）

- 1 「生徒が主役」の学校をつくります
- 2 「主体的な学び手を育てる授業」をつくります
- 3 学校、地域、家庭が連携し、「地域と共に子どもを育てる学校」をつくり、「持続可能な社会の創り手」を育てます
- 4 職員が「One Team」となり働き方改革を推し進め、南部中に勤務する職員が幸せを感じられ、それが子供の笑顔や幸せにつながる学校をつくります

○ 経営の重点

1 方針1に対して

- (1) 「主体性」をキーワードに、全ての教育活動を「主体的に行動し、自分の良さや可能性に気付くことができる生徒」を目指したものにしていく。
- (2) 学校生活全般において、生徒自身が「自己決定する・集団決定する」機会を可能な限り用意し、「生徒の生徒による、生徒のための学校創り」を行う
- (3) 新規不登校生徒を生まないようにするために、全ての生徒が学級内で自分の存在や発言が受け入れられているという「心理的安全」を感じられるよう、「居場所づくり」と「絆づくり」に意図的、計画的に取り組む。
- (4) 生徒に失敗を恐れず、勇気をもって挑戦する「トライ&エラー」を推奨する。教師も信じて、任せて、認める「信・任・認」のスタンスを大切にするにより、生徒の意欲や粘り強い取り組みを引き出す。授業では、「分からない」が言える環境を教師と生徒で作り出すなど、安心して失敗できる環境を与えることにも配慮する。

2 方針2に対して

- (1) 学びのハンドルを生徒に与え、「教師が教える」から「生徒が自ら学ぶ」授業を意識し実践する。
- (2) 正解が一つではない問いや、生徒にとって魅力的な課題を用意したり、時には生徒自らに課題を設定させたりし、主体的に課題解決（探究）に取り組む場面や、1人1台端末を効果的に活用し、学習の成果を仲間に発表する（プレゼンテーションする）場面を意図的に設定する。INPUT中心からOUTPUT中心の授業への転換を図る。
- (3) 生徒自身が学びの定着度を知る「メタ認知」を促す。その上で、授業や家庭学習において、個に応じて取り組む課題を変えたり、自分自身で取り組む内容を選択したりできるような「個別最適化な学び」を推進する。
- (4) 校内研修において、生徒の主体性を引き出す様々なアプローチについて研究、実践する。

3 方針3に対して

- (1) 学校公開週間、各種行事を利用し、学校に来てもらう、見てもらう機会を可能な限り設け、広くご意見を伺う。また、学校 HP や便りを使って、積極的に情報の発信に努める。
- (2) コミュニティスクールの機能を生かし、CSD、学校運営協議会委員、PTA 役員の皆様の力を借りながら、地域人材に学校の教育活動への積極的な参画をお願いする。また、地域からのボランティアの要請等には積極的に協力し、W I N-W I N の関係を構築する。
- (3) 生徒が地域と積極的に関わり、そこにある課題を発見し解決したり、地域貢献したりする機会をできる限り創出するために、授業や特別活動、生徒会・委員会活動、部活動等の中で ESD、SDG s を意識した積極的な取組を考え、実践する。

4 方針4に対して

- (1) 「先生（大人）の幸せが子供の笑顔をつくる」を合言葉に、教師が常に生き生きとした表情で子どもの前に立てるよう、業務の精選、カリキュラムマネジメントを進め、残業時間の上限目安月 45 時間、年 360 時間の達成を目指す。
- (2) 職員が「利他の心」を持ち、相手を思いやりながら、忙しい時や困った時にはお互いが協力し合える協力体制や、何でも言い合える風通しの良い職員室の雰囲気作りに取り組む。
- (3) スクラップアンドビルドの考え方を常に持ち、無くすべきものは無くしていく方向で考える。また、学校が行うのではなく、外部に任せられるものについては、できる限り任せていく。ビルドについては、「生徒にとって有益である」というだけではなく、教師がやりがいを感じられ生徒や教師がわくわくできるような活動であるかどうかという視点に立って考えていく
- (4) 部活動の地域移行が段階的に進んでいく中で、本校の部活動の在り方についてもさらに改善していく。本年度から特定の部活動において、部活動指導員を配置し、土日の部活動を地域の指導者に任せていく研究を進めていく。また、他の部においても指導のサポートができる外部指導者を発掘していく。